

第2回（2）第1次日本文化ブーム

第1次日本文化ブームは、幕末の開国期から世界恐慌。葛飾北斎（1760-1849）の版画がフランス人の目に触れ、歌川広重（1797-1858）の浮世絵も海外へ紹介され、そこから波動したいわゆるジャポニスムである。「日本主義」「日本ブーム」「日本熱」「日本熱」「日本趣味」といった意味では、特に美術においては印象派とアール・ヌーヴォーに日本美術の影響を認めることができる。1862年の第2回ロンドン万国博覧会、1867年の第2回パリ万国博覧会、1873年のウィーン万国博覧会、1878年の第3回パリ万国博覧会、1900年の第5回パリ万国博覧会に使節団として、藩として、国家として日本は参加している。参加形態は様々であるが、日本文化の発信という点が重要であろう。美術界における注目が中心であった。また、1925年にアーサー・ウェイリー（Arthur Waley, 1889-1966）によって『源氏物語』（*The Tale of Genji*）の英訳が出版されたこともその後の日本文化ブームに影響を与えることとなる。

①浮世絵の紹介

一般的な「浮世絵」の定義を『広辞苑』（2008）から紹介してみたい。

江戸時代に発達した民衆的な風俗画の様式。肉筆も行なわれたが、特に版画において独自の美をひらいた。（中略）作家としては、ほかに鳥居清信・西川祐信・鳥居清長・喜多川歌麿・東洲斎写楽・葛飾北斎・歌川広重などが名高く、十九世紀後半からヨーロッパの美術へも影響を及ぼした。⁽¹⁾

ここでは特に葛飾北斎に注目しておこう。

江戸時代後期、葛飾北斎（1760～1849）は、自ら”画狂人”と称するほど終生描くことに情熱を燃やし、九十年に及ぶ人生を画業一筋に歩んだことはよく知られています。このような北斎の尽きることのない探求心

が盛り込まれているのが「北斎漫画」全十五編であり、不朽の名作「富嶽三十六景」と並んで彼の代表作とされています。

「北斎漫画」でいう漫画とは、折りにふれ、筆のおもむくままに描いた絵といった意味であり、森羅万象あらゆるものを題材に描いた「北斎漫画」は、まさに眼で見る江戸百科ともいうべきものです。それは北斎自身のデータバンクともいうべき性格もおびていて、「富嶽三十六景」の作品中にも、「北斎漫画」から図柄や構図の原型をもってきたものが見られます。このような「北斎漫画」は、当時、江戸の庶民から大名まで広く親しまれ、今日で言う大ベストセラーとなりました。⁽²⁾

『北斎漫画』とは、葛飾北斎が絵手本として発行したスケッチ画集で、1812年秋頃、後援者で門人の牧墨僊（1775-1824）宅に半年ほど逗留し300余りの下絵を描いたと言われている。1814年に名古屋の版元永楽屋東四郎（永楽堂）から初編が発行され、その後1878年までに全15編が発行された。人物、風俗、動植物、妖怪変化まで約4000図が描かれている。国内で好評を博しただけでなく、その後、日本の浮世絵がヨーロッパに広まる契機となったのは1865年のことである。フランスの画家ブラックモン（Félix Bracquemond, 1833-1914）が陶器の梱包用の包み紙として利用されていた『北斎漫画』を見つけたことから始まった。ヨーロッパの浮世絵の影響としてよく紹介されるのはマネ作『エミール・ゾラの肖像』（1866）、ゴッホ作『タンギー爺さん』（1887夏頃）、ゴッホ作『タンギー爺さん』（1887冬頃）にはその背景に浮世絵が描かれていることは周知の通りである。ジャポニスムとも言えるものである。

②ジャポニスム

一般的な「ジャポニスム」の定義を『広辞苑』（2008）から紹介してみたい。

【japonisme フランス】日本趣味。特に、十九世紀後半のフランスで浮世絵の移入やパリ万国博覧会の出品物により流行したもの。印象派の画家などに影響を与える。⁽³⁾

浮世絵のところでも紹介したが、葛飾北斎の『北斎漫画』はヨーロッパにも紹介された。

「北斎漫画」は、日本国内だけでなく 19 世紀中頃、ヨーロッパにも伝えられ、ジャポニズムの流行をひきおこす原動力となり、マネやドガをはじめとする印象派の画家にも多大な影響を与えました。彼らは、「北斎漫画」の持つ卓越した描写力と構図に驚嘆し、模写したり、そのエッセンスを自らの作品のなかに取り入れました。当時パリでは、北斎を神聖視する風潮すらあったといわれています⁽⁴⁾

なお、万国博覧会については「④万国博覧会」で後述する。ジャポニズムと方向性は異なるが、日本の開国と共に急速に進んだのが外交である。

日本の文化に興味を抱き、理解しようとした最初の人々は、外交官たちであった。彼らは、ヨーロッパへ美術や工芸品等日本独自の「モノ」を紹介すると同時に、日本の歴史や言語、社会、文化、精神等を研究・紹介し、はからずも日本文化の国際化に貢献することになった。⁽⁵⁾

しかし、言語の問題はもとより文化の理解が求められた。外交が国と国との交際であることは当然であるが、外交官の果たす役割が外交に大きく左右することを否定する者はいないだろう。ここに外交官による日本研究（ジャパノロジー）が始まるのである。ここでは簡単に紹介しておくことにとどめたい。オールコック (Sir Rutherford Alcock, 1809-1897)、アーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow, 1843-1929)、バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)、ウィリアム・ジョージ・アストン (William George Aston, 1841-1911) 等がいる。彼等の日本研究がその後の日本研究に大きな影響を与えたことは言うまでもないことだ。

③アール・ヌーヴォー

一般的な「アール・ヌーヴォー」の定義を『広辞苑』(2008) から紹介してみたい。

【art nouveau フランス】(「新芸術」の意。一八九五年開店の工芸品店の名に因むという) モリスらのデザイン運動を源流とする一九世紀末の装飾芸術。植物の枝や蔓を思わせる曲線の流れを特色とする。建築・工芸・絵画・ポスターなどさまざまなジャンルにわたり、二〇世紀の芸術に大きな影響を与えた。⁽⁶⁾

アール・ヌーヴォーは、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパを中心に開花した国際的な美術運動で「新しい芸術」という意味である。装飾品や建築物に特にその様相があらわれたと言ってよいだろう。理論的には、イギリスではウィリアム・モリス(William Morris, 1834-1896)やジョン・ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)らによるアーツ・アンド・クラフト運動による諸論文の中に現われているといわれているが、「アール・ヌーヴォー」という言葉は 1894 年にベルギーの雑誌『ラール・モデルヌ』(『現代美術』*L'Art moderne*)においてアンリ・ヴァン・デ・ヴェルデ(Henry Clemens Van de Velde, 1863-1957)の芸術作品を形容する言葉としてエドモン・ピカル(Edmond Picard, 1836-1924)が初めて用いた。

アール・ヌーヴォーでは次の 3 点が大きな特徴となるだろう。

- 1 芸術と工芸の融合
- 2 新しい、きわだって現代的デザインの様式
- 3 素材の本性より個人的ヴィジョンを優先⁽⁷⁾

一般的に認められている観点としては、アール・ヌーヴォーの時代よりも少し前にジャポニズムが起り、エミール・ガレ(Charles Martin Emile Gallé, 1846-1904)やルネ・ラリック(René Lalique, 1860-1945)が感化されたといわれている。19 世紀末にはジャパニスムとアール・ヌーヴォーが交差することに

なり、特に美術や工芸の分野で日本文化の影響が顕著に見られるようになる。最後にジャポニスム学会のホームページに、掲載されている「ジャポニスム」の定義について紹介しておきたい。

ジャポニスムとは19世紀後半、日本の開国を直接のきっかけとして、西欧に多くの日本美術品が知られるようになり、そのエキゾティックなモチーフ、独特の彩色、非対称の構図や自由な視点、自然との親近感などが、西欧の造形美術家たちを強く刺激して生れた新しい芸術の傾向ですが、それは今日では美術に限らずファッションや建築、音楽、文学などにもまたがる幅広い分野での新しい運動として理解されています。ですから、学会のメンバーの研究対象もこのような分野へと広がっています。ジャポニスムは、単に西欧が珍しい東洋の文化を取り入れたというだけのものではなく、ルネッサンス期に構築された西欧中心の世界観が、時代に即して自らを解体し、再構築するときに日本や東アジアのものの見方、考えかたを導入することによって大きく変わっていったダイナミックな運動なのです。⁽⁸⁾

④万国博覧会

一般的な「万国博覧会」の定義を『広辞苑』（2008）から紹介してみたい。

【万国博覧会】(International Exhibition)世界各国が参加する博覧会。最初は一八五一年ロンドンで開催。のち一九二八年国際博覧会条約がパリで締結され、日本は六五年加盟。七〇年に大阪で、二〇〇五年に愛知県で開催。略称、万博。⁽⁹⁾

文化交流、文化外交という観点から見れば万国博覧会は重要なイベントである。

万国博覧会は、十八世紀末にフランスで行なわれた国家が推進する国内

産業品の展示会を起源とする。当初は国内市場の活性化を目的とした製品の展示会であったが、万国博覧会となることで国家間の製品競争となり、やがては様々なスペクタクルによって商品を幻想化していく資本主義の文化装置へとなった。

万国博覧会は、これまでの研究から大きく三つの側面に分けることができる。第一に国家間の技術競争、第二に消費と娯楽、第三に帝国の支配を正当化する文化装置、ディスプレイである。この三つの要素はそれぞれにからみあいながら万国博覧会を形成していた。⁽¹⁰⁾

「万国博覧会と日本」については、アジア歴史資料センターのホームページに「万国博覧会に見る日本」と題して、以下のように述べられている。

万国博覧会に最初に日本が登場したのは、1867年（慶応3年）のパリ万博です。しかし、この時は、幕府、薩摩藩、佐賀藩がそれぞれ独自に出品を行っただけで、まだ「日本」という国を紹介するとは言えないかたちでした。この後明治維新が進み、初めて明治政府、つまり日本の政府として正式に万国博覧会に参加したのが、この次の1873年（明治6年）のウィーン万博でした。⁽¹¹⁾

博覧会と言えば物品の展示会が中となるイメージもあるが、川上音二郎・貞奴一座も海外公演を果たしていることも付け加えておきたい。なお、過去の万国博覧会の開催地については外務省のホームページより紹介しておきたい。

【1800年代】

ロンドン	1851. 05. 01-1851. 11. 11	国際博覧会の始まり
ニューヨーク	1853. 07. 14-1854. 11. 01	米国初の国際博覧会
パリ	1855. 05. 15-1855. 11. 15	仏初の国際博覧会　始めて万国博覧会と称す
ロンドン	1862. 05. 01-1862. 11. 1	日本の遣欧使節団が視察
パリ	1867. 04. 01-1867. 11. 03	日本初出品「幕府」「薩摩」「鍋

島」が参加

ウィーン	1873. 05. 01-1873. 10. 31	日本政府としての公式参加
フィラデルフィア	1876. 05. 10-1876. 11. 10	米国独立 100 周年
パリ	1878. 05. 01-1878. 11. 10	エジソンの蓄音機、自動車、冷蔵庫等出展
メルボルン	1880. 10. 01-1881. 04. 30	
バルセロナ	1888. 04. 08-1888. 12. 10	
パリ	1889. 05. 05-1889. 10. 31	フランス革命 100 周年 エッフェル塔建設（エジソンの白熱電球で初の夜間照明）
シカゴ	1893. 05. 01-1893. 10. 30	コロンブスの新大陸発見 400 年 空中観覧車
ブリュッセル	1897. 05. 10-1897-11. 08	

【1900 年代】

パリ	1900. 04. 15-1900. 11. 12	クジ付き入場券を発売 地下鉄、動く歩道
セントルイス	1904. 04. 30-1904. 12. 01	ルイジアナ買収 100 周年
リエージュ	1905. 04. 27-1905. 11. 06	ベルギー独立 75 周年
ミラノ	1906. 04. 28-1906. 10. 31	
ブリュッセル	1910. 04. 23-1910. 11	
ゲント	1913. 04. 26-1913. 12	
サンフランシスコ	1915. 02. 20-1915. 12. 04	パナマ運河開通記念 第 1 次大戦勃発
	1928. 11. 22	国際博覧会条約採択（施行は 1931. 1. 17）
バルセロナ	1929. 05. 19-1930. 01. 15	
シカゴ	1933. 05. 27-1933. 11. 12	
	1934. 05. 26-1934. 10. 31	はじめて「テーマ」登場 「進歩の世紀」
ブリュッセル	1935. 04. 27-1935. 11. 06	「民族を通じての平和」条約による最初の第 1 種一般博

パリ	1937. 05. 25-1937. 11. 25	「現代生活の中の芸術と技術」 ピカソのゲルニカ出展
ニューヨーク	1939. 04. 30-1939. 10. 31	
	1940. 05. 11-1940. 10. 27	「明日の世界と建設」ワシントン大統領就任 150 周年 ナイロン、プラスチック、テレビなど出展 第二次世界大戦
ブリュッセル	1958. 04. 17-1958. 10. 19	「科学文明とヒューマニズム」 (第二次大戦後第 1 回の万博)
シアトル	1962. 04. 21-1962. 10. 21	「宇宙時代の人類」
ニューヨーク	1964. 04. 22-1964. 10. 18	
	1965. 04. 21-1965. 10. 17	「理解を通じての平和」(BIE 非公認)
モントリオール	1967. 04. 28-1967. 10. 29	「人間とその世界」カナダ連邦 100 周年
大阪	1970. 03. 15-1970. 09. 13	「人類の進歩と調和」日本初の万博
スポーケン	1974. 05. 04-1974. 11. 03	「汚染なき進歩」
沖縄	1975. 07. 17-1976. 01. 18	「海—その望ましい未来」
ノックスビル	1982. 05. 01-1982. 10. 31	「エネルギーは世界の原動力」
ニューオリンズ	1984. 05. 12-1984. 11. 11	「河の世界—水は命の源」
筑波	1985. 03. 17-1985. 09. 16	「人間、居住、環境と科学技術」
バンクーバー	1986. 05. 02-1986. 10. 13	「動く世界、ふれあう世界」
ブリスベン	1988. 04. 30-1988. 10. 30	「技術時代のレジャー」豪州建国 200 周年
大阪	1990. 04. 01-1990. 09. 30	「花と緑と生活の係わりを捉え 21 世紀へ 向けて潤いのある社会の創造を目指す」(国際園芸博)
セビリア	1992. 04. 20-1992. 10. 12	「発見の時代」コロンブス米大陸発見 500 周年
ジェノア	1992. 05. 15-1992. 08. 15	「グリストファー・コロンブス

—船と海」

テジョン (韓国) 1993. 08. 07-1993. 11. 07 「発展のための新しい道への挑戦」

リスボン 1998. 05. 22-1998. 09. 30 「海洋—未来への遺産」

【2000 年代】

ハノーバー 2000. 06. 01-2000. 10. 31 「人間—自然—技術」

愛知 2005. 03. 25-2005. 09. 25 「自然の叡智」

サラゴサ 2008. 06. 14-2008. 09. 14 「Water and Sustainable Development」

上海 2010. 05. 01-2010. 10. 31 「Better City, Better Life」

特に 1900 年のパリ万博については林忠正シンポジウム実行委員会編『林忠正 ジャポニスムと文化交流』(日本女子大学叢書 3) (ブリュッケ、2007 年 2 月) がよい参考となる。さらに吉田典子「一九〇〇パリ万国博覧会—政治・文化・表象」によれば、この万博の特徴を 3 点挙げている。第 1 に工学技術に対する装飾の優位、アール・ヌーヴォーの興隆、第 2 に植民地展示の拡大と商業・広告の優位、第 3 にスペクタクル、イリュージョン、アトラクションの優位としている。⁽¹²⁾ もちろん、この現象が突然現れたわけではないが、1900 年になって明確な形で登場したということである。

⑤英訳『源氏物語』

日本文学中最も世界で知られている文学は、おそらく『源氏物語』と言っても過言ではないだろう。『源氏物語』が世界で知られ、認められるには、その文学性はもちろのことであるが、英訳の力は無視できない。『源氏物語』の英訳史を簡単に述べると、末松謙澄(1855-1920)がはじめて英訳を施して出版したのは、1882 年(Trubner & Co.)のことで、「桐壺」から「絵合」までの内容である。

西洋人によって英訳されたのは、アーサー・ウェイリーにより、*The Tale*

*of Genji*として世に出たのは1925年(George Allen & Unwin)のことであった。その後はエドワード・サイデンステッカー(Edward G. Seidensticker, 1921-)の英訳(Alfred A. Knopf, 1976)、ロイヤル・タイラー(Royall Tyler, 1936-)の英訳(Viking Press, 2001)などがある。ピーター・ミルワード(Peter Milward, 1925-)は「世界文学としての源氏物語の魅力」の中で3つの英訳それぞれの面白さについて次のように述べている。

- ・原文に一番近いのはタイラー訳。もっとも離れているはウェイリー訳
- ・『源氏物語』をイギリスの読者に知らせるため、自由に翻訳したウェイリー
- ・学問的な立場から直訳的に訳したサイデンステッカーとタイラー
- ・翻訳者によって、チャプターのタイトルや登場人物の名前も違ってくる⁽¹³⁾

これを突き詰めていけば翻訳論になってしまうが、異文化理解の原点ともいえるだろう。

日本の文学作品が英訳され、世界に紹介されると、いわゆる海外の日本研究者が日本の古典文学から日本人のこころを読み解こうとしたことは周知の通りである。

注

- (1) 新村出編『広辞苑』(岩波書店、2008年1月)、p.240.
- (2) 「浮世絵師 葛飾北斎」(<http://www.hokusai.gr.jp/> 2009年12月27日)
- (3) 『広辞苑』, p.1307.
- (4) 「浮世絵師 葛飾北斎」(<http://www.hokusai.gr.jp/> 2009年12月27日)
- (5) 吉良芳恵「日本文化の国際化—ジャパノロジー誕生」(小風秀雅『近代日本と国際社会』放送大学教育振興会、2004年3月)、p.107.

- (6) 『広辞苑』, p.2.
- (7) ミルヴァーマン／天野知香・松岡新一郎訳『アール・ヌーヴォー』（青土社、1999年12月）、p.16.
- (8) 「ジャポニスム圧壊」（<http://www.world-meeting.co.jp/japonisme/ja/about.html> 2009年11月30日）
- (9) 『広辞苑』, p.2316.
- (10) 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』（吉川弘文館、2008年6月）、p.1.
- (11) 「5 万国博覧会に見る日本～明治・昭和の『COOL JAPAN』～」
（<http://www.jacar.go.jp/special/p05/index.html> 2010年1月4日）
- (12) 吉田典子「一九〇〇パリ万国博覧会—政治・文化・表象」（『国際文化学』第3号、神戸大学国際文化学部、2000年9月）、pp.15-16.
- (13) 「世界文学としての源氏物語」（<http://www.angel-zaidan.org/Genjiform2004/milwad.htm> 2010年1月6日）